



Title	韓国魚類養殖業の課題とその方向
Author(s)	李, 承来; 八木, 庸夫
Citation	長崎大学水産学部研究報告, v.73, pp.45-48; 1993
Issue Date	1993-02
URL	http://hdl.handle.net/10069/29849
Right	

This document is downloaded at: 2018-08-16T22:28:52Z

韓国魚類養殖業の課題とその方向*1

李 承 来,*2 八 木 庸 夫

The Problems and Prospects of
Korean Finfish Culture

Seung-Rae LEE and Tsuneo YAGI

The yellowtail culture in Korea started in early 1980 and recently culture of fish, sea bass, rock fish, red sea bream, puffer fish and other fishes have been developed. However, like any other industries without an exception, Korean fish culture also began with the trial and error method during its development. Korean finfish culture is faced with various problems such as fishing ground, information on marketing, capital, and techniques. The first reason is why the water temperature in most of the areas used for the fish culture is lower than that in Japan. Hence, it is difficult to culture them in winters as compared to Japan. The second reason is why the information of marketing system is limited. The Korean finfish culture techniques were introduced from Japan purposing to export its fishery products. The Korean people adopted the Japanese aquaculture techniques without doing analysis of its situation. The last reason is why the investment and techniques are limited. It is difficult for the individual fishermen to invest for the construction of aquaculture facilities and for the development of aquaculture technology. Due to the existing problems that beset the fish culture sector, firstly it is necessary to convert current species into the new species adaptable to the Korean conditions. Studies on the development of techniques on seeding culture, feed formulation and diseases should be given an emphasis. At the same time, Korea need skilled technical manpower to apply the development of different country's aquacultural techniques suitable for the domestic situation. Secondly the capitalistic management system should be introduced in order to achieve the development of the aquaculture industry. Under the capitalistic economy, that is an inevitable to maintain and develop as a growing industry in the international society. Otherwise, it would decline the industry relative to the other from the capital formation of international competitiveness point of view.

Key words: 魚類養殖 finfish aquaculture; 漁場 fishing ground; 流通情報 information on marketing; 資本と技術 capital and techniques; 資本主義経済 capitalistic economy; 国際競争力 international competitiveness.

韓国の水産業は遠洋漁業と養殖業によって大きく発展してきた。初期段階には養殖業の中でも特に貝類や海藻類などを主対象とする浅海養殖業がその中核的な役割を果たしていたため、一般には養殖業と例えば貝類海藻類の養殖を連想する状態であったと

いってよいと思う。

しかしながら、1970年代後半に入ってから国内外における水産業の生産環境が大きく変化してきた。国際的には200海里経済水域の設定で操業水域の縮小及び喪失が続き、遠洋漁業はその存続の危機を迎

*1 日韓両国における養殖漁業の比較研究-8 (A Comparative Study on Japanese and Korean Aquaculture-8).

*2 国立釜山水産大学校 (National Fisheries University of Pusan, Pusan, Korea).

えている。国内では急激な漁船勢力と漁獲努力の増加によって国内水産資源はほとんど枯渇状態に陥り、沿岸漁業が不可能に近い状態になっている。

このような漁船漁業生産の減少をカバーするために成立した養魚業は急速に成長したものの、漁場の過密化と老朽化をもたらし、漁場の生産性低下や各種疾病の発生、生産物の品質低下などをもたらした。また、高度成長期の工業化政策による臨海工業団地やその後背都市の拡大により、産業廃棄物、都市下水、生活廃棄物などが沿岸海域に流れ込み、漁場汚染が極めて深刻な問題になっている。

以上のような生産側面における不利な条件の発生にもかかわらず、現在、国民所得水準の向上とそれによる消費構造並びに食生活の変化などによって活魚の需要が増加している。その結果、1970年代になって始まったハマチ養殖を始めとする魚類養殖業が現在ブームを迎えているが、その生産技術や養殖経営はなお多くの弱点を抱えていると思われる。

幸い長崎大学の配慮により、1989年から1991年までの3年間に亘り、日韓両国の魚類養殖業に関する現地調査を行うことができた。その結果を土台に、国際化時代を迎えた韓国の魚類養殖業が、今後国際競争力を持ちながら発展できるように研究を進めていかねばならないが、具体的な法案等に関する研究は今後に残しながら、本稿ではその方向のみを提示することにする。

1. 魚類養殖の現況

あらゆる産業がその初期には多くの試行錯誤を経験するが、魚類養殖も同様に多くの問題点を含んでいる。特に魚類養殖は無機物生産を行う工業部門とは違い、生物を生産対象にするため生産過程が複雑に構成され、固有の難しい問題が内在している。先進国では養殖生産が可能であってもこれを発展途上国に導入し、現地に適応させるには、多くの時間や努力、資本が必要である。多くの試行錯誤を踏まえた後でなければ量産体制に達することはできないと考えられる。韓国の魚類養殖業の現状を把握してみたい。

韓国の魚類養殖業は、生産面積や生産量からみて、なお初期導入段階にあるといつてよい。1970年代の初めに、ハマチ、タイなどの天然種苗を採取し一時養殖した後日本に輸出したのが始まりであった。1983年からは政府の事業支援政策や育成政策によって急激な生産施設投資の増加と生産量の増加が見られる。(Table 1, 2)

当初はハマチ生産が養殖業の中心であり、1987年以後はヒラメやスズキ、メバル、マダイ類、フグなどに養殖魚類が多様化されているが、これらはまだ量産段階には至っていない。

2. 魚類養殖の問題点

日本に比べ韓国の魚類養殖はまだ初期段階にある

Table 1. Present conditions of fishing ground of the aquaculture in Korea

Year	'72		'83		'84		'85		'86		'87		'88	
	no	ha	no	ha	no	ha	no	ha	no	ha	no	ha	no	ha
Fish reserve	-	-	54	117	80	182	102	165	169	263	176	262	196	283
Enclosure culture	11	81	5	41	5	41	8	48	12	68	25	184	57	300
Cistern of inland	-	-	-	-	3	2	12	4	14	5	56	29	121	52
Total	11	81	59	158	88	225	122	217	195	336	257	475	374	635

Source: Fishery Administration in Korea.

Table 2. Present conditions of production of the aquaculture in Korea

Year	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90
Spacies							
Yellowtail	323	1,351	2,910	1,418	1,258	1,569	462
Flatfish	-	-	-	20	16	249	1,037
The others	8	62	5	335	16	843	1,157*
Total (MT)	331	1,413	2,915	1,773	1,290	2,661	2,656

* Here is included seabass 391, black rockfish 386, red sea bream 284, swellfish 43 and the others 48.
Source: Statistical Yearbook of Agriculture, Forestry and Fisheries in Korea.

ことから、日本で過去に経験した問題点などがそのままあらわれているところもある。日本では1960年代初期に兵庫県、香川県等瀬戸内海東部を中心にブリ類養殖業が始まった。当時は水温等の自然条件からハマチの越冬飼育が難しく、全量当才魚(2Kg未満)で出荷されていた。それが1960年代後半に越冬ものの生産が始まってからは、養殖ブリとして3~4Kg程度の2年魚が刺身用として商品化されるようになる。1970年代前半には瀬戸内海東部の先発産地に対して鹿児島、長崎などの有利な自然条件をもつ後発産地が台頭し、ブリ類養殖の産地交替が始まる。この過程で特に注目すべきことは市況の悪化が飼育期間の延長、生産物大型化の契機になったことである。⁸⁾ しかしながらこのような産地交替、生産物大型化、多様化、市場の全国化などの過程には、漁場汚染問題、生産過剰問題、販路問題など多くの問題点が伏在していた。

韓国は事前の十分な基礎研究・調査抜きで日本から養殖方法を導入したので、日本同様の多くの難点を抱えることになった。これらの問題点のうち、根本的で構造的なものを大別すると、漁場の不利、流通情報の不備、資本と技術の不足などが挙げられる。

第1に漁場条件についてみると、韓国の漁場の海水温度が温帯性魚種の養殖には不適であるという点が挙げられる。特にハマチは最低水温8°C以下では越冬ができないといわれている。韓国においては、これに適合する越冬可能海域としては済州島、巨文島近辺海域があるだけである。しかも済州島の冬は風が強くて養殖施設の保持が困難であり、巨文島は港湾施設及び養殖施設設置可能漁場が狭いので、いずれも魚類養殖業の展開には限界があると思われる。当才魚出荷となれば価格面での不利が避けられないが、越冬場に移動するには追加費用の問題がある。そこで冬季以前の一時期に大量出荷し、供給過剰による価格下落、いわゆる大漁貧乏の悪循環を繰り返すしかないのである。したがって生産者有利の売手市場にはならず、常に買手市場の下で購買者と戦う弱い立場に置かれざるをえないのである。

第2に各種流通情報体制の不備がある。韓国にハマチ養殖が導入された時期は、日本で生産過剰のため価格が下落した時期であった (Fig. 1)。

日本では、1979年には生産量が約29%増加することによって価格が約20%下落した。次いで1983年には生産量は約6.6%しか増加しなかったが価格は約18%も下落し、その後も価格下落が続いている。このよ

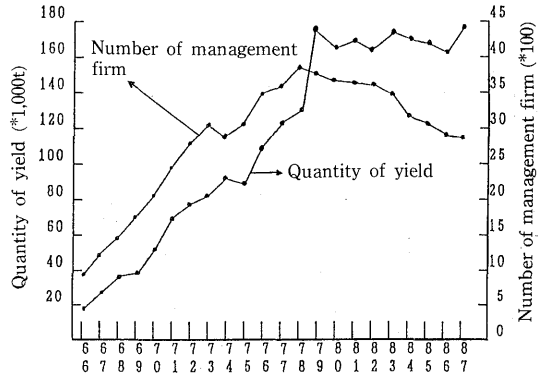


Fig. 1. Trend of the yellowtail of aquaculture in Japan.

Source: Annual Statistics on the Fishery and Culture Production in Japan.

うに日本ではハマチ養殖業が衰退期を迎えて、経営体数が減少し、残存経営体は経営の多様化と生産物の大型化(ブリ生産への転換)などの方向で体質改善を図ってきたのであるが、まさにそのような時期に韓国にハマチ養殖業が導入されたのである。したがって日本と競争することは考えられない。それにもかかわらず対日輸出を目的として大勢の人がハマチ養殖業に参入したのである。当時の韓国は国内市場情報や活魚流通施設がなお極めて不備であった。

第3は資本と技術面での脆弱性である。韓国における魚類養殖業は、漁業外の大資本家が副業的に投資して始められたものが大部分であった。そのため養殖業には投機対象となる可能性が内在しており、持続的な産業として発展できる可能性が乏しく、技術開発の努力が払われ難く、また技術は日本から導入すればよいという安易な考えを持つものが多い。技術自体は借り物でもよいかも知れないが、養殖技術は機械工程に依存する工業技術とは違い人間労働と不可分であり、従事者の信念と勤労意欲によって結果が大きく異ってくる。現在日本からマダイが逆輸入され、国内生産者に深刻な経営圧迫を加えていることが、技術開発の必要性を間接的に強調しているように思われる。

3. 改善方向

韓国の魚類養殖業は以上指摘したような構造的な問題点を緩和ないし克服すべき転換点に立たされている。その対策の一環として本論では二つの側面からその改善方向を提示したい。

第1に技術開発である。技術開発課題の中でも、韓国の漁場条件に適合する魚種を選択することが先決であると思われる。現行の養殖魚種では国際競争が厳しいため、むしろ代替魚種を選択して、種苗生産、餌料開発、魚病対策などを結合した一貫した技術体系を確立しなければならない。また韓国では養殖技術の歴史が浅いだけに、手軽な方法で先進国の技術を導入しようとする傾向がある。しかしながら先進技術の導入においても、韓国の漁場条件に合うように養殖方法を調整できる応用能力を育てることが必要である。技術開発は一夜にして行われるものではない。養殖経営者も国家もそれに対する十分な認識をもって、思い切った投資をするべきである。水産業の産業的、地理的、作業構造上の特殊性のため、大部分の養殖業者は保守的であり、経験主義的で消極的な思考形態を持つ。したがって養殖業者のみによる技術開発に多くを期待することはできない。このような状況であるから、政府は魚類養殖業が21世紀に国際競争力ある有力な食料供給産業であることを認識し、積極的な技術開発投資をすべきである。

第2に強調したいのは、養殖業にも資本主義的経営を導入することの必要性である。現段階では難しい問題であるが、国際化時代には避けられない課題であろう。日本と韓国は農業問題及び農民問題で国際的に苦戦しており、水産業においても同様である。しかしながら漁場は私財ではなく公有財産であるので、農業問題と水産問題を同列に論じることはできない。水産業に適合する資本主義経営を導入することにより、経営活動は計画的で積極的なものになるであろう。特に、これまで韓国の魚類養殖業は対日

輸出を目的にきてただけに、国内市場における流通機能の確立が遅れてきたし、対日輸出価格によって経営成果が左右される不安定性を持ってきた。このような責任を国内消費者に転嫁することによって消費者価格は高くなり、高級養殖魚類は高額所得者層のみが消費するものであるかのように認識されている。こうした経営の改善によって、経営者はみずから流通構造改善事業に積極的に参与、協助し、価格引下の方向を模索し、積極的な企業家精神をもって、需要創出にも努力するようになると思われる。

以上の改善対策の確立には、養殖業者みずからその重要性を認識し、積極的に参与することが何より重要である。また政府も魚類養殖業の重要性を認識し、養殖業者が積極的に参与できるような基盤条件の形成を助成すべきである。このために政府及び関連団体は魚類養殖構造改善のための基盤助成事業に思い切った財政支援を行うべきであろう。

引用文献

- 1) 朴厚根: 養殖, 21-31, (1990.2)
- 2) 孫秀昌: 養殖, 32-37, (1990.2)
- 3) 金成貴: 養殖, 61-65, (1990.3)
- 4) 八木庸夫: 養殖, 288, 105-109, (1987)
- 5) 八木庸夫: 養殖, 289, 106-109, (1987)
- 6) 島秀典: 養殖, 290, 74-77, (1987)
- 7) 濱田英嗣: 水産振興, 238, 1-40 (1987)
- 8) 古林英一: 西日本漁業経済論集, 29, 109-121, (1988)